

内山 節著『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』

20年ほど前に会社を定年でリタイアしてから、TVや新聞や雑誌を殆ど見なくなった。白内障で視力が落ちたこと、社会的生活の比重が小さくなって世間のデキゴトなどには関心が薄れてきたことなどの所為もあると思うが、私にとってはそれ以上に例えばTVの放映は映像にしろアナウンサーやコメンテーターの解説にしろ、これでもかこれでもかと微に入り細に入った情報が提供され視聴者があれこれ想像する余地が全く無い情報提供のスタイルとなっていることがTVを見なくなった原因である。このようなTVは見ていて全く面白くない。

これでは、視聴者は一方的な情報洪水に流されているだけで、まさに情報暴力というべきシロモノであろう。NHKや専門チャンネル以外の視聴料無料の民放は基本的にはスポンサーの広告収入で運営されている訳だから、スポンサーの販促を目的にした一方的な情報提供理論の是非に無料視聴者が文句を付ける権利は無いと言われればそれはそのとうりであろうから、これはそのようなチャンネルを開かなければそれで済むことではあるが・・・。

提供される情報に読者側での想像の余地があるかどうかということに関しては、活字媒体による新聞や雑誌の記事はTVの世界に較べれば未だ少しはマシなような気もするが、画一強圧的な（上から目線の威圧的な）文章にはやはり読者が想像力を働かせる余地が無く、一方的な情報洪水であることには変わらない。これは、書き手と読み手が同じ土俵の上で双方向でコミュニケーションできるという環境になっていないからであろう。更にもう少し言えば、社会の営みとしての人間の共同体の在り方や意識が変化し、かつての人間同士が響き合って生活していた“伝統社会”が消えて個人個人バラバラの世の中になってきたということでもあろう。

また、情報の求め方から言えば、情報技術の発達によって“求める解が欲しい形で直ちに得られる”という情報社会の負の効用に拠るところが多い。即ち、モノを考えて求める解を引き出すということではなく、如何に手間暇を掛けずに求める解を得るかという“情報取得技術”が最優先され、このことが各種の“受験技術”などにも適用されて、膨大な知識をアタマに詰め込んで、しかも如何に早くそれらの知識を検索して解答するかということが合格法のイの一番であるということになった。

その結果、高級ロボットにしか過ぎない“秀才”が社会を支配する状況となり、世の中の多様性が欠如してしまったというのは言いすぎであろうか？ この間の事情は、東大入学式祝辞（平成31年度）で社会学者の上野千鶴子東大名誉教授が述べた「・・・大学で学ぶ価値とは、すでにある知を身につけることではなく、これまで誰も見たことのない知を生み出すための知を身に付けることである・・・」という一言に凝縮されている。また、この文言の主旨は言い換えれば、初めから解が得られること分かっている問題の解を求めるなどという行為ではなく、解があるかどうかすらも分からない問題に挑戦して貰いたいという意味でもあろう。

マ、ちょっと前置きが長くなったが、私が言いたいことは、膨大な知識の大海に漂っている現今の社会は他人が集めた膨大な知識を右から左に読み（聞き）飛ばしているだけで、自分では知というものを全く生み出していないということである。年がら年中流れ続けているTVの映像や新聞記事からは何の想像も浮かんでこないということはこのような意味である。



さて、本論。

ここで紹介した本は書名が少々変わっていて、上述のような一言一偲の文言（即ち、名は態を表わす）にはなっていない。果たしてこの本は一体どのような分野の本であろうか、社会学の分野なのか、民俗学なのか、心理学なのか、歴史学なのか、陰陽学なのか、郷土史なのか、或いははたまた童話の分野であるのか・・・？ まずは書名からして興味をそそられる。

また、著者は高卒で大学教授になったという珍しい経歴の哲学者で、群馬県上野村の山奥で里山生活をしながら伝統的共同体での体験を基にした論評や随想を多数発表している。山里の釣り、森や里山の暮らしにも造詣が深い。本書は以下のような問題点の認識から出発している。

“キツネに騙される”というのは、かつての日本では珍しいことでも何でもなく、極くありふれたことであった。人間を騙す動物はキツネだけではなくて、タヌキ、ムジナ、イタチ、オコジョなどもいるし、オオサキという想像上の動物もいた。平安時代に活躍した陰陽師・安倍晴明は、後世になってからは信太の森のキツネ・葛の葉から生まれたという伝説が定着し、「恋しくば 尋ね来てみよ 和泉なる 信太の森の 恨み葛の葉」という有名な歌も流行して人々はこれを疑わなかった。

人間もまた化かし合いをした。これらは村や町などの運命共同体に住む人間同士がお互い響き合って生活していた頃のことであったが、何の因果か昭和40年くらいに日本経済が高度成長期に入りだした頃を境にしてキツネに騙されたという話が消えてしまった。日本の国土からキツネが消えた訳ではないし、またキツネの化かし能力が無くなった訳でもないのに、一体何が起こったのだろうか。

著者は日本全国各地を廻って、何故キツネに騙されたという話が発生しなくなったのかを聞いて廻った。人々が話してくれた回答を大雑把に分けると、①経済の高度成長による人間の考え方の変化、②科学・技術の進歩に伴う変化（即ち科学・技術万能という考え方への変化）③情報・コミュニケーションの変化、④高校・大学への進学率の増加、⑤死生観の変化、⑥自然観の変化、などに分類できるそうだ。

この内、私にとって我が意を得たりとするのは③の情報・コミュニケーションの変化である。村の共同体で暮らす人々にとって大事な情報源は、日常語である口語体で語られる人から人へ伝えられる情報（伝達者である人間を伴っている情報、生活情報、伝承など）や、また季節の天候の変化や農業暦を読み取るための自然からの情報の授受の仕方の変化であった。これらの情報は、村人が自分で感じたことを同じ共同体の他のメンバーにも語り、またその聞き手もその話の中から事実を自分で探り当てながら聞いて行くという過程で共同体のメンバー間の意志疎通と合意形成が図られる訳である。

このような、それまでは謂わばローカルだった情報源が、TVというメディアによって、全国一律に伝達される中央からの映像と解説によって視聴者の“読み取る”という想像力の余地を消し去ってしまった。こうして、村人が必要とした情報の在り方やその伝達のされ方が大きく変わった。それがコミュニケーションのかたちを変え、キツネと人間の間に成立していた伝統的なコミュニケーションを喪失させたのだと言う。

何やら話がややこしくなってきたが、著者が本書の「まえがき」で述べていることを以下に引用して一読をお薦めしたい。

『なぜキツネに騙されなくなったのかという問いを繰り返すうちに、キツネに騙され続けた自然と人間の歴史、里の歴史、自然とコミュニケーションをとりながら暮らした民衆の精神史などと向き合わなければならなくなったからである。そのことを通して一般的な歴史学からは「見えない歴史」を掘み直す必要性に迫られた。歴史とは何かを、歴史哲学の課題として考察し直す必要性を感じた。・・・本書が「私たちの現在」を考える一助になれば幸である』。